入間市教研

会　報　No.60
発　行　令和7年2月21日
発行者　入間市教育研究会
代　表　会長　佐竹　英樹

会長あいさつ

入間市教育研究会
会長　佐竹　英樹

会員の皆様のご尽力、ご協力により、令和六年度の本研究会の活動も無事に終えようとしているところです。心より御礼申し上げます。また、本年度研究発表会を開催していただいた扇小学校、金子小学校、狭山小学校、東金子小学校、黒須中学校の教職員の皆様をはじめ、研究に携わっていただいた方々に、この場をお借りしまして再度の御礼を申し上げます。

話は変わりますが、埼玉県連合教育研究会の創設六十周年にあたり、依頼に基づき入間市教育研究会のあゆみを寄稿しました。その一部を紹介させていただきます。

～本会は戦後、豊岡教育研究会として七市町村の連合体として発足し、町村合併等を経て、入間市教育研究会となり、七十年以上の歴史を持っている。豊岡小学校で結成総会が行われ、発足以来七十数星霜、先人である諸先輩方の尽力、努力により、会の組織も整備され、市の教育進展に寄与してきた。その間継続して研究活動に取り組み、現在に至る～

現会員の我々は先輩方が築き上げてきた伝統を継承、発展させてしっかり次代の先生方へ引き継ぎたいと思います。

結びになりますが、入間市教育委員会教育長　中田一平様をはじめ委員会の皆様、本会員の皆様、各校理事の先生方、そして各研究部長の先生方をはじめ、多くの先生方に本研究会の運営や事業に対しまして、多大なるご尽力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

令和六年度夏季講演会
「どんな経験も自分の糧にする」

入間市スポーツアンバサダー
小田島　理恵　氏

私が車椅子の生活になって感じたことは、自分自身の障害だけではなく、町の中に生活の妨げになるものがたくさんあるということです。勤め先も限定されます。配慮が必要なのです。そのために障害者雇用があります。私は都内まで電車通勤ですが。最短距離ではなく、混み具合や安全性などを考慮し、ルートを考えています。

また、バリアフリーのバリアは、「物理的なバリア」、「制度的なバリア」、「情報面のバリア」があり、「意識上のバリア」は差別や偏見であり、これがなくなることで、障害のある人が社会でもっと過ごしやすくなります。私が行っている車椅子バスケの体験会は、車椅子の生活について知ってもらうためのきっかけの場にしています。心のバリアをなくして、手助けをしてもらえると、段差はバリアではなくなるのです。

私が車椅子バスケを始めたのは、二十二歳のとき、事故があり、そのとき、家族にとても支えてもらいました。父が教えてくれた施設で車椅子バスケの体験教室のチラシを見て、軽い気持ちで参加したのですが、それがとても楽しく、次の週からチーム練習に参加するようになりました。コーチがパラリンピアンということもあり、自分もパラリンピックに出たいという気持ちになりました。東京パラリンピックを経験し、価値観や世界観、人生観というものが広がったと感じました。「障害を乗り越えて…」みたいな記事がありますが、「(障害は)仕方がないから受け入れている」という思いを本当はチームのみんなが持っているのだと思います。でも、「生きていればいいことがある」ということを、同じような状況の人に持ってもらいたいと思っています。私も障害を持ったこと自体、良かったと言ったら変ですが、こういう経験をしたということが必ずしもマイナスではないのかなというように思うことができています。子ども達には「誰だって頑張れないときはある。そのときはなんとか耐える。また頑張れるようになったら頑張ればいいんだよ」と伝えています。プラスになるきっかけはどこに転がっているかわからないのです。

令和六年度研究委嘱発表校

「楽しい授業の展開」
～教師の主体的な学びが子の最適な学びをつくる～

扇小学校

一　主題設定の理由

本校の目指す児童像は、自ら疑問を持ち、協働し、やり切るといった、『自走する子』の育成である。そのためには、児童一人一人に最適な学びをつくることが重要であり、その授業こそが児童にとって、『楽しい授業』であるとし、本主題を設定した。

二　研究の取り組み

主題の実現を図るため、令和五年度では教師自身の五つの力（課題設定力、授業構成力、板書構成力、発問力、対応力）を高めてきた。そして、本発表を控えた本年では、その力を元にして、

①アタック25
②さっとGPT
③ジャンプの課題

の三つの取り組みで、児童の最適な学びのための実践を行った。

一つ目のアタック25とは、一授業で最低25分の学習活動を確保する取り組みである。（ここでいう本校の学習活動とは、視写を含まず考えを書く時間、学び合う時間、話し合う時間である。）

二つ目のさっとGPTとは、前述のアタック25を確実に実施するために、導入は短く、すぐにグループ（G）、ペア（P）、探求（T）を児童に行わせる取り組みである。

三つ目のジャンプの課題とは、いくつかのレベルに応じたジャンプの課題を出題し、児童同士の学び合いや話し合いをより活発にさせるための取り組みである。

三　成果と課題

三つの取り組みを全職員が一丸となり意識することで、教師の説明時間が格段に減り、課題に向き合う時間が増えた。しかし、ジャンプ課題の難易度の調整や、時間配分に苦慮することがあった。

「主体的に学び、表現する児童の育成」
～子どもたちが学びあう国語科の授業の工夫～

金子小学校

一　主題設定の理由

学力調査の結果等から国語科（特に読むこと）に課題があることが明らかとなった。校長の学校経営理念「かかわることで人は育つ」のもと、国語科の研究を通じて授業改善を図ることで児童の国語力を高め、学びあうことができる児童を育成していくこととした。

二　研究の仮説

国語科の授業で、学習活動を工夫すると、主体的に学び、表現する児童が育つだろう。

三　研究の取組

・授業研究の視点を意識した授業実践を積み重ねた。
①魅力的な学習活動
②必要感のある学習活動
③個で考える活動（時間）
④学びあう活動（個）
・教科書教材（物語文）の言語活動一覧表を作成、活用。
・学習活動の工夫。（課題意識、学びあい、ふりかえり）
・指導案に「子どものゴール」を明記。「単元のめあて」を毎時間黒板に掲示。
・多様な表現方法の活用。（音読、話合い、朗読、動作化、書く、タブレットで共有等）
・帯活動の設定。（読み聞かせ、三文スピーチ、言葉集め、ちょっトーク、感情読み等）
・デジタル教科書の活用。
・国語、関連図書コーナー設置。（特別支援学級：けやき学級）
・様々なゲームやことわざクイズ音読等の実施。きれいな言葉、優しい言い方の習得と穏やかに集中できる環境づくり。

四　成果と課題

○国語が好きな児童が七割以上、学びあいが好きな児童が九割以上いる。また、授業のねらいや児童の関心に即した言語活動を教師が選択、実践できた。

▼読書好きな児童は約八割と高いが、読書量、読書時間の向上としては不十分。家庭とも連携して継続して取り組んでいく。

「進んで学び合う児童の育成」
～算数科を中心に、学ぶ楽しさを実感させる授業実践～

狭山小学校

一　主題設定の理由

本校の実態として、埼玉県学力学習状況調査の結果から、「学習を楽しいと感じている割合」、「学習に対する粘り強さの割合」が県平均より、も低い傾向にあることがわかる。そこで、以前から研究を進めていた「わかる」授業実践に、昨年度からはさらに児童の主体性を伸ばし、学ぶ楽しさをより感じられるよう「学び合い」を授業に取り入れ、授業改革を行った。学校全体で研究を進めていくため、教科を算数科に絞り、主体的に学ぶ児童の姿を目指していくこととした。

二　研究の仮説

「探究と協同の学び」を展開し、一人残らず児童の学びを保障すれば、学ぶ楽しさを実感し、児童が進んで学び合うだろう。

三　研究の取組

①講演会の拝聴
先進校視聴・視察、校内共有
②全学年コの字型の机配置
③ペア・グループ学習の導入
④ジャンプの課題の導入
⑤教師及び児童の声の大きさを意識してトーンダウン

四　成果と課題

わからないときに諦めずにいろいろな方法を考えようとするようになった。児童へのアンケートからは学び合いによって「進んで学ぶ」ことや「楽しく学ぶ」ことができるようになっていることもわかった。また、「落ち着いた雰囲気で学習するようになった。」ことや「わからないときに友達に『教えて。』と声をかけるようになった。」など、アンケート以外から感じる成果も出ている。

教師の声かけの仕方やジャンプの課題設定については課題もある。今後もよりよい「学び合い」の進め方を研究していく。

「学び伸びる東金子の子 育成」
～一人一人に確かな「生きる力を」～

東金子小学校

一　主題設定の理由

本校の児童は、大変素直であいさつもよくできる子が多い。学習規律も比較的よく、落ち着いている。その一方で、様々な理由（発達障害傾向の特性、家庭の諸事情、外国籍等）から、諸学力・学習状況調査の結果からも学びに向かう意欲が低い状況にあることがわかった。そこで、一人一人が学ぶことの楽しさを味わい、自分の成長を喜び、友達と認め合う児童を育てるため、本主題を設定した。

二　研究推進体制

1「全体会」　全教員の共通理解を、図る。
2「学びの会」　教員の定期的及び自主的な学び合い。

三　研究の内容と方法

1授業の実践と省察
入間市「学びのスタンダード6」に迫る授業実践（全学級授業公開、提案授業、管理職による教室訪問、初任者示範授業、年次研修研究授業）を通して、省察を行う。
2学び合いに関する児童への意識調査の実施
3全国及び埼玉県学力・学習状況調査の分析と考察の実施

四　成果と課題

1　成果

・これまで学習に意欲的に参加できていなかった児童が、ジャンプの課題に興味を示し、学習に取り組む様子が見られた。
・友達との関わりの中で、授業中に笑顔がたくさん見られ、温かい言葉が教室から聞かれるようになった。
・教職員どうしで互いに学び合う同僚性が昨年度より増して構築できた。

2　課題

・今後、教科の幅を広げ、学び合いが常態化するよう研究を進める。
・「聴く」「つなぐ」「もどす」の技法をさらに追究する。
・「学び合い」への取組と学力のつながりについて関連性を分析する。

令和六年度研究委嘱校（一年次）

「考え、議論する道徳の授業づくり」
～生徒一人ひとりが自分自身の問題と捉え、向き合う授業を通して～

黒須中学校

一　主題設定の理由

本校では平成二十九年度から、『学び合い学習』に取り組んでいる。そこで、『学び合い学習』で得た成果に、「ツールを取り入れた道徳授業」を加えることで、より深く事象を見つめ、高い道徳的実践力が発揮できる生徒を育成できる、と考え、この主題を設定した。

二　研究仮説

○『学び合い学習』を取り入れた授業と、「ツール」を取り入れた授業、この二つで「考え、議論する道徳」の授業づくりが充実するのではないか。

三　主な研究の取組

1　ツールを活用した授業実践

心情メーターや、心情円、クラゲチャートなどツール活用の研究、実践に当たった。学習時の座席配置は4人グループとし、発問数を絞り、「聴(き)き合い」の時間確保と、中心発問をより深める時間の確保に努めた。

2　教室内に『道徳の木』作成

生徒が互いの考えに触れることで、実践力向上につながるよう、各教室に『道徳の木』を作成し、生徒の思いを掲示した。

3　道徳通信の発行

多面的・多角的に自分の考えと照らし合わせることと、担任の思いも伝え、望ましい学級経営の一助とするため、道徳の授業後、道徳通信を発行した。

四　研究の成果と今後の課題

ツールを活用することで、意図的な発問をより意識して授業を組み立てられるようになった。また、学び合いの型を取り入れた授業を行い、日頃の積み重ねを活かせたことで、生徒同士が活発に「聴(き)き合う」場面が多くみられた。

ただし、生徒が道徳で考えたことを、日常生活に活かそうとしている様子には課題がみられた。今後も更なるツールや発問の吟味に努め指導力を向上させたい

『楽しい授業の追求（算数科）』
～学び合いを取り入れ、個別最適な学びを進める授業～

宮寺小学校

一　主題設定の理由

本校の実態として、学び合いの場面が楽しいと回答する児童が多い。学び合いは、果たして、どのような形態、時間やバランスで取り入れていくことが学力向上に効果的であるのか。習熟度別の学習が学力向上に効果的であることも十分に考えられる。本研究では、学び合いと習熟度別学習を取り入れ、「楽しい授業」を追求していく。

二　研究の取組み

①授業改善に向けて「スタンダードの作成」「外部指導者を招聘し、授業研究会（毎学期）の実施」

②児童理解「楽しい授業とは？児童へ意識調査実施（毎学期末）」

③連携「学校便りや週報、懇談会等で学び合いと自主学習を話題にし、保護者への啓発」

三　次年度へ向けて

「楽しい」授業の実践を通し、学び合う学習活動の充実に努める。

『自分の考えを表現し、学び合う児童の育成』
～安心の中で生まれる対話を目指して～

藤沢東小学校

一　主題設定の理由

本校の実態として、自分の考えを他者に伝えることに苦手意識を持つ児童が多い。誰にとっても安心した学びの場をデザインしたり、学び合いやICTを活用した学習を行ったりすることを通して、自分の考えを表現する力を高めていきたい。

二　研究の取組

安心部、学び合い部、ICT部に分かれて研究を進める。

（安心部）職員の同僚性を基盤にした安心できる学校づくり、児童・職員アンケートの実施

（学び合い部）児童たちがワクワクする授業デザインの研究

（ICT部）ICT環境の整備、学習アプリ活用方法の周知

三　次年度へ向けて

協働的な学びの経験を通して、自分の考えを表現する力を高め、藤沢東小学校としての「学び合い」を確立していきたい。

「未来に向かって「あい」と「チャレンジ」「リスペクト」
～算数科を通して豊かに考えともに高まる学びの実践～

豊岡小学校

一　主題設定の理由

物事に主体的に取り組むとともに他者との関わりの中で課題を解決する能力の育成が重要になってきている。そのためには、日々の授業の改善と集団力の育成が必要である。そこで本校では、算数科を通して学び合いの学習を進め、他者と豊かに関わりながら未来に向かう学力の向上を目指し、本主題を設定した。

二　研究の取り組み

①学び合いによる授業の充実のために「学びの作法の定着」とそれに基づいた学び合いの実践、単元を通したジャンプの課題の開発・実践、一人一回以上の指導者を招聘しての授業研究会の実施、研究協議会の充実に取り組む。

②心理的安全性を育む学級集団の育成のために学級力アンケートの計画的実施と活用を図る。

三　次年度に向けて

実践の中で、学び合いの授業の蓄積が図られている。さらに、学び合いの授業を充実させ、学び合い高め会う児童の育成を目指す。

「共に学び合い、考えを深め合う児童の育成」

黒須小学校

一　主題設定の理由

「令和の日本型教育」における個別最適な学びと協働的な学びを実現していくうえで、教師が教える授業から児童自らが主体的に学ぶ授業への質的転換が求められている。そのための有効な手立てとして、今年度本校では学び合い学習を取り入れることをねらいとして本課題を設定した。

二　研究の取組み

①授業改善に向けて、「茨城学びの会」代表を招聘し、指導助言を有効活用する。また、学習効果を高められるような学び合い学習を実践する。

②家庭学習の定着を図る。そのために「黒須小家庭学習の手引き」を作成し「学年×10分」の学習時間を設定し習慣化を図る。

三　次年度へ向けて

課題の工夫を行い、全学級で机をコの字に配置し、考えを深め合うよう学び合い学習を実践する。

『一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、その学びの質を高める』
～「学び合い学習」個人研究を通して～

豊岡中学校

一　はじめに

本校では、「学び合い学習」の研究を進めて、十三年目を迎えた。「継続は力なり」を合言葉に、委嘱一年目の研究では、全教員が個々にテーマを設定し、研究に取り組む。

二　具体的な取組

まず、教員一人一人の研究テーマを次の三つの観点から設定した。

①「ジャンプの課題」の内容の精選・充実を目指した研究。

②「ファシリテーター」としての授業者の適切な役割の研究。

③「その他」の研究

次に、各教科及び個人で生徒アンケートを取り、それぞれの研究の指針とし、進行中である。

三　おわりに

年二回フォーカス授業研究会を実施している。各方面から多くの先生方のご参会も得た。これらを弾みにして更に尽力していきたい。

『効率的な研修体制づくりを通した「学び合い学習」の実践』
～効率的でサスティナブルな研修で「学び合い」のシンカを～

東金子中学校

一　主題設定の理由

学び合い学習もカタチになってきた今、さらなるレベルアップを図るべき内容を、効率的でサスティナブルな研修を考え、構築していく中で獲得していこうとした。

二　研究の取組

(1)研修体制づくり

①R6夏季研修

②カジュアル研究授業一人2回

③フォーカス研究授業　年2回

④「談話室マドガワ」教科部会

⑤「テラCOやた」リクエスト研修

(2)学び合い

①『具体例（実際の授業）からジャンプ課題について考える』

②　教師の関わり方

三　次年度へ向けて

研究課題が「効率的で持続可能な研修体制づくり」であることを念頭に、本研究を毎年マイナーチェンジしながら継続できるようにしたい。

『自分を磨き仲間と伸びることができる学び合う学級の実現を目指して』

上藤沢中学校

一　主題設定の理由

研究を通して、教員が生徒理解をより深めながら、心理的安全性の担保された学級を実現し、落ち着いた環境の中で、互いに学び合い・高め合う生徒の育成を目指す。

二　研究の取り組み

①谷井茂久氏を2回招聘し、講演・指導・助言をいただいた。
②学び合い学習体験研修
③フォーカス授業を2回実施
④先行研究授業を4回実施
⑤研究授業一人一回実施

三　次年度へ向けて

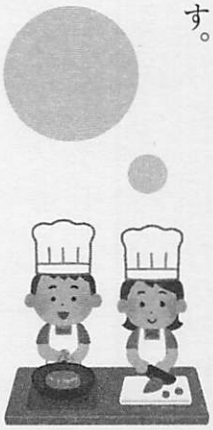
「やり方を学ぶ」から「実践する」というフェイズに入るため、日々の実践や研究授業を通して、明らかになった課題を共有し、自分を磨き、仲間と伸びることが出来る学級や生徒の育成に直結する研究を進めていく。

研究部研究の成果

家庭科（小）

今年度は、発明創意工夫展の審査会を藤沢小で実施しました。発明創意工夫展に向けては、夏休みの課題としてお知らせいただいたあと、各学校にて校内審査をしていただきました。その後、学校から各一点ずつ作品を持ち寄り、計十六点の中から埼玉県発明創意工夫展に出品する作品を一点決めました。

各学校から集められた作品は、どれも児童の思いと創意が込められた素敵なものばかりでした。また審査会の際には、各校の出品数が減少傾向であることについて話題となりました。さらに発明という視点での審査についての悩みもあがりました。次年度に向けて、作品募集の際の工夫などを検討していきたいと思います。



理科

今年度は、入間市科学教育振興展覧会を東町中学校で実施し、地区展に出品する作品を選出しました。

今年度も昨年度に引き続き、レポート形式での作品となりました。審査の中で、他校の先生とも情報交換ができ、科学展の作品としての重要なポイントや、理科への探求心を高める取り組みなど、理科部会として大切な知識を共有することができました。

展示会については、今年度も行われませんでしたが、地区展に出品したすばらしい作品を共有するために、出品した作品を冊子にして市内で共有するという取り組みを行いました。

来年度の科学展での展示会の実施は未定ですが、児童・生徒の、理科への学習意欲の向上のために、今年度行った地区展出品作品の冊子などの効果をふり返り、次年度に生かしていきたいです

外国語

今年度は、昨年度同様、英語科の先生方や主任の先生方のご協力のもと、活動を進めることができました。

4月の主任会では、昨年度の活動報告と引継ぎを行い、その中で英語弁論暗唱大会の取り組みが主な話題となりました。県・全国大会の実施予定を踏まえ、市内大会開催の準備を進め、暗唱の部では令和7年度から1・2年生のみの参加となるため、今年度は段階的に各学年で1位の賞を設け、総合優勝も与える形式としました。台風接近による急な変更にもかかわらず、各校の先生方の対応のおかげで、生徒の発表に支障なく大会を終えることができました。今年もレベルの高い大会となり、英語科やALTの先生方のお力添えが大きな支えとなりました。

また、上藤沢中の授業研究では、「学び合い」の授業について研究協議を行いました。

道徳

今年度の道徳研究部会は、年度当初の主任会において昨年度に引き続き研究授業を行うこととした。年間の研究主題を「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めることのできる児童・生徒の育成」と決め、各校で研究を進めた。

授業研究会を小・中学校共に行った。東金子小学校主幹教諭の村野由佳先生にご指導をいただき、上藤沢中学校の荻野孝博教諭、黒須小学校の吉永万紀子教諭に授業を提供していただいた。研究主題に沿って、「学び合いや全体交流でさまざまな友達の考えにふれられれば、物事を多面的・多角的に考えることができるだろう。」、「さまざまなツールを用いて価値に迫る活動を行えば、自己の生き方について考えを深めることができるだろう。」という仮説を立て、授業研究・研究協議を行った。来年度、入間地区道徳教育研究会にて黒須小学校が授業研究会発表担当校になっているため、その準備も行った。

音楽

今年度行った活動の主となるものは、小中学校音楽会である。四月、八月の主任会において計画・検討・情報交換等行い準備を進めてきた。七月には市内部活動の部の発表（中学校）、十一月には市内小中学校音楽会を開催した。また、同月には小中音楽会西部南地区も開催され、藤沢北小学校と黒須中学校が出演し、日頃の練習の成果を発表した。

また、五月には入間地区音楽研究会の研修「授業力向上に向けて」七月には「音楽科教育の充実に向けて～今後の音楽教育科の授業を考える～」に参加、情報共有し学びを深めた。

令和七年度は関東ブロック音楽研究会埼玉大会（戸田大会）があるため、研究・協議会に参加し、情報共有している。音楽科教育の更なる充実に向けて研究を進めていく。

書写

書写研究部では今年度、県内の硬筆優秀作品が一堂に会する「硬筆中央展覧会」を豊岡小学校で開催させていただきました。六月二九・三十日の二日間で、暑い中にも関わらず約六千人が観覧に来てくださりました。入間市開催ということもあり、市内からも通常の倍の数の選手が県展に出品することができ、市内の子供達も熱意を持って取り組むことができました。また、市内展も同時開催することで、市内展を見に来た子供達にも、県展の作品のレベルの高さをより近くで感じてもらうことができました。次の書き初め展につながる良い会となりました。四月の年度当初から、各小中学校の先生方にご準備いただき、会場となった豊岡小学校の先生方にも多くのご協力をいただきました。皆様、本当にありがとうございました。

情報

今年度は昨年度と同様に、視聴覚部の先生方のご協力のもと、活動を行うことができた。

今年度の主な活動としては、鶴ヶ島市立第一小学校で実施された「ICT活用研修会」や、「情報モラルの輪を広げようプロジェクト」に担当が参加した。ICT活用研修会では、タブレット端末にインストールされているアプリケーションの効果的な活用方法を学ぶことができた。来年度当初の研修会では、今年度研修で学んだことを市内で共有する予定である。

また、昨年度の研修会では、情報教育の年間指導計画を各校で共有した。今年度は昨年共有したものをもとに年間指導計画を作成し、各校で指導に当たることができた。

来年度は、Apple社の講師を招き、引き続きタブレット端末の効果的な使用法について研修会を検討したい。

体育・保体

体育・保体研究部では小・中学校それぞれで授業研究会を行った。小学校では、「ハードル走」「ボール運動」「保健」の領域について、藤沢小、高倉小、黒須小を会場として授業研究協議会を行った。協議会ではそれぞれの領域について研究課題に沿った話し合いをし、各校での体育授業の充実に向けての研鑽を積んだ。中学校では、金子中学校で授業研究会を行った。昨年度に引き続き「ＩＣＴ活用を通して共同的に課題発見や課題解決を図る指導の工夫」を研究の柱と設定した。今年度は「サッカー」の授業で「ＩＣＴの活用」について研究を進めることが出来た。

今後に向けては、より一層入間体育の充実を図れるように小中学校が連携を図りながら取り組んでいきたい。

教務

今年度は、全ての研修会を集合型で行うことができた。集合型で行うことで、お互いの学校の情報交換ができ、とても有意義であった。

例年のように二月の研究協議会においては、①今年度の反省、②次年度年間行事予定の確認等を行った。年間の授業日数・給食の日数や行事日程のすり合わせを行い、各校の年間行事予定を調整することができた。

また、各校で懸案となっている年間の授業時数の設定等について議論し、実践や案を出し合うことで、より効果的で合理的な授業時数の設定について共有できた。

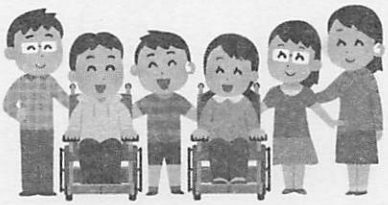
来年度も引き続き、お互いの学校の情報交換を積極的に行い、教務に係る業務の充実を図っていきたい。その際、校務支援システム等も積極的に活用したい。

特別支援

今年度の研修は、八月二十日に巡回支援でお世話になっている春木豊先生と指導主事の金佐和子先生をお招きし、特別支援学級担任者会と合同で行った。

普段考えていることや悩んでいることをグループに分かれて話し合った。特別支援学級担任者会の先生方とも交流を深めつつ、特別支援教育に携わる多くの先生方と直接顔を合わせて話をすることで、配慮を要する児童生徒への支援の具体的な方法や想いを共有することができた。

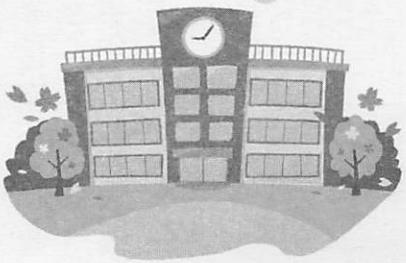
また、担任者会の行事である小中学校特別支援学級交流会と作品展は、各中学校区ごとに行った。どの学校の作品も、素敵な作品ばかりだった。作品を作る上でのアイデアや工夫を知る良い機会になった。



編集後記

会報編集委員では、市教研理事から五名が選出され、編集にあたっている。

入間市教育研究会での学校研究の成果を共有し、多くの学びを得ることができた。令和六年度は五校が研究発表を実施し、令和七年度は七校が発表を予定している。

また、各部の活動計画報告では、計画的に実施され、コロナ禍を経て、工夫を凝らした活動が実践されてきた。

これらの活動を、継承し、発展させていくことがこれまでの研鑽をさらに積み重ねていくことに繋がると感じている。